

釜神町遺跡

(第17地点)

—共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2018

水戸市教育委員会

かま がみ ちょう
釜 神 町 遺 跡

(第17地点)

—共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 1 8

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。そして、私たちの祖先もこの豊かな自然のもと生活を営んできました。

釜神町遺跡が立地する天王町一帯は千波湖を望む台地上にあり、江戸時代には水戸城下の武家屋敷地が広がっていた地域の一つで、現在も往時の景観を色濃く伝える閑静な住宅街であります。本市ではこのような、水戸らしい風情、情緒、たたずまいを醸し出す歴史的景観を、歴史的資源として位置づけ、天下の魁、水戸にふさわしい風格ある歴史のまちづくりを進めております。こうした歴史的資源のなかでも、発掘調査等の学術情報は年々増加の一途を辿り、その魅力は本市の歴史的資源の特色の一つとなっています。

さて、このたびの発掘調査は、共同住宅建設工事に伴い、平成29年度に実施したもので、埋蔵文化財を記録保存するために行われました。調査の結果、縄文時代の竪穴建物跡が1軒確認されました。これまでの周辺での調査結果では江戸時代の遺構や遺物が多く確認されておりますが、今回の調査で当遺跡が縄文時代から江戸時代にかけて連綿とした生活の痕跡が残されていることが判明しました。

このたび刊行の運びとなりました本報告書では、このような縄文時代の生活や暮らしを伺い知ることができる最新の学術的成果が盛り込まれております。ここに刊行いたします本書が、学術研究等の資料のみならず、水戸の誇りである歴史遺産を生かしたまちづくりの機運の高揚の一助となり、郷土の歴史を再認識されるきっかけとなりますことを期待し、ごあいさつといたします。

最後になりましたが、発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、多大な御理解と御協力を賜りました事業者 綿引 義城 様、地域住民の皆様には末筆ながら心から感謝申し上げます、ごあいさつの言葉といたします。

平成30年7月

水戸市教育委員会
教育長 本多 清峰

例 言

- 1 本書は、水戸市に所在する釜神町遺跡（第17地点）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は共同住宅建設工事に伴い、事業者 綿引 義城の委託を受け、水戸市教育委員会の指導の下、有限会社毛野考古学研究所が行った。
- 3 調査概要及び調査組織は、下記の通りである。

所在地	水戸市備前町 750-2	
調査面積	189.75 m ²	
調査期間	平成 29 年 8 月 17 日～平成 29 年 8 月 31 日	
調査主体者	有限会社毛野考古学研究所茨城支所（支所長 土生朗治）	
調査担当者	長井正欣(有限会社毛野考古学研究所所長) 早川麗司(有限会社毛野考古学研究所)	
測量・空撮	小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）	
調査参加者	小沢明子 金谷奈央 濱敏子 平田佳子 細小路友愛	
調査指導	水戸市教育委員会教育長	本多清峰
	水戸市教育委員会教育部長	七字裕二
	水戸市教育委員会教育部歴史文化財課長	白石嘉亮
	水戸市教育委員会教育部歴史文化財課水戸市埋蔵文化財センター所長	関口慶久
	水戸市教育委員会教育部歴史文化財課水戸市埋蔵文化財センター主幹	新垣清貴
- 4 整理期間と整理担当，整理技師は以下のとおりである。

整理期間	平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 7 月 31 日
整理担当	海老澤稔（有限会社毛野考古学研究所）
整理技師	金谷奈央 大津智美
- 5 本書は海老澤・新垣が分担して執筆し，関口・新垣の指導のもと，海老澤が編集した。
- 6 出土遺物及び図面・写真などの記録類は，報告書刊行後一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管する。
- 7 発掘調査から本書の刊行に至るまで，下記の諸機関・各位より御指導・御協力を賜った。御芳名を記して深く謝意を表する次第です（敬称略）。
綿引 義城 茨城県教育庁総務企画部文化課

凡 例

- 1 本書に記している座標値は，世界測地系に基づく。挿図の内，平面図の方位記号は座標北を，土層堆積断面図の水準標高の数値は海拔標高をそれぞれ示す（単位：m）。
- 2 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所 色票監修 2007年版）に準拠する。
- 3 遺構平面図及び土層堆積断面図の縮尺は，1/60，1/100，1/200を基本とし，各図にスケールを明示した。
- 4 遺物実測図の縮尺は，土器類を1/3で掲載し，各図にスケールを明示した。
- 5 遺物写真の縮尺は実測図と同じである。
- 6 実測図・一覧表等で使用した記号は次のとおりである。
遺構 SI- 竪穴建物跡 SK- 土坑 SP- ピット
土層 K- 攪乱
- 7 遺構一覧表・遺物観察表の表記は，次のとおりである。
 - (1) 計測値の単位はm，cm，gで示した。なお，現存値は〈 〉を，推定値は（ ）を付して示した。
 - (2) 遺物観察表の備考の欄は，残存率及びその他必要と思われる事項を記した。
 - (3) 遺物番号は各遺構ごとの通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。
- 8 遺構の主軸は，長軸（径）とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は，主軸が座標北から見て，どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N -10° - E）。

目 次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理の方法	1
第3節 調査・整理の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 発見された遺構・遺物	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構・遺物	7
1 竪穴建物跡	8
2 土坑	12
3 ピット	14
4 遺構外出土遺物	15
第Ⅳ章 まとめ	17
第1節 土地利用の概観	17
第2節 縄文時代中期の遺構・遺物について	17

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第1図	調査地点位置図及び既往の調査地点 (1 : 5,000) ……………	3	第6図	第1号竪穴建物跡実測図……………	10
第2図	周辺遺跡分布図 (1 : 25,000) ………	5	第7図	第1号竪穴建物跡出土遺物実測図……	11
第3図	基本土層図……………	7	第8図	第1号土坑実測図……………	12
第4図	調査区設定図……………	8	第9図	第1～31号ピット実測図……………	13
第5図	調査区1全体図……………	9	第10図	遺構外出土遺物実測図……………	15

表 目 次

第1表	既往の調査地点一覧表……………	3	第5表	ピット一覧表……………	14
第2表	周辺遺跡一覧表……………	5	第6表	遺構外出土遺物観察表……………	15
第3表	第1号竪穴建物跡内ピット一覧表……	10	第7表	出土遺物集計表……………	15
第4表	第1号竪穴建物跡出土遺物観察表……	12			

写 真 図 版 目 次

写真図版1	A. 調査区遠景 (北から) B. 調査区遠景 (西から) C. 調査前状況 D. 遺構確認状況 E. 調査区全景 F. 調査区1全景 G. 調査区2全景 H. 第1号竪穴建物跡全景
写真図版2	A. 第1号竪穴建物跡 (北から) B. 第1号竪穴建物跡 (東から) C. 第1号竪穴建物跡遺物出土状況(北から) D. 第1号竪穴建物跡遺物出土状況(東から) E. 第1号土坑完掘状況 (東から) F. 第8・19号ピット土層断面 (西から) G. 調査区1終了状況 (南西から) H. 調査区1終了状況 (南から)
写真図版3	出土遺物

第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

平成 29 年 3 月 23 日付けで、共同住宅建設工事に伴い、綿引 義城（以下「事業者」という）から水戸市教育委員会（以下「市教委」という）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」（教埋第 310 号）の照会があった。

照会地である水戸市備前町 750-2 は、周知の埋蔵文化財包蔵地「釜神町遺跡」の範囲内に該当しており、遺構の存在が予想されるため、市教委の職員による現地踏査が実施された。その結果、近世以降の陶磁器片が採集できたため、市教委は試掘・確認調査を実施した（釜神町遺跡第 17 地点第 1 次調査）。試掘調査の結果、縄文土器が多数出土するとともに同時期の性格不明遺構 1 基、ピット 1 基が確認された。市教委は、遺跡の保存について、事業者と工法の変更に係る協議を実施したが協議の結果、地盤改良等が必要であるため、設計変更が困難であるとの結論に至った。

このような状況を踏まえ、市教委は平成 29 年 5 月 24 日付け教埋第 312 号にて、茨城県教育委員会（以下「県教委」という）教育長あて、文化財保護法（以下「法」という）第 93 条第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」を提出した。これを受けて、県教委教育長から平成 29 年 6 月 9 日付け文第 597 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が確認された場合にはその保存等について別途協議をする旨、勧告があった。

これを受けて事業者は、平成 29 年 7 月 27 日有限会社毛野考古学研究所（以下「調査機関」という）と発掘調査業務委託契約を締結するとともに、調査機関及び市教委と発掘調査実施に係る協定を締結した。調査機関は法 92 条第 1 項の規定により、平成 29 年 8 月 1 日付け「埋蔵文化財発掘調査の届出について」（教埋第 884 号）を県教委教育長あて提出し、その後、県教委教育長から調査機関へ平成 29 年 8 月 24 日付け文第 1329 号「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」にて、適切に発掘調査を実施する旨の指示があった。

以上のような経過のもと、当該調査を釜神町遺跡第 17 地点第 2 次調査として、平成 29 年 8 月 17 日から平成 29 年 8 月 31 日にかけて発掘調査を実施することとなった。（新垣）

第 2 節 調査・整理の方法

発掘調査 試掘・確認調査に基づいて、平成 29 年 8 月 17 日から表土除去作業を行った。まず、重機によって表土下 40～70 cm まで掘削した。その後、人力による遺構確認作業を行い、写真撮影と遺構確認状況図を作成した。グリッドは世界測地系に基づき、調査区内に 5 m 四方に杭を設置した。遺構は、平面プラン確認の状況から 4 区画のベルト設定をし、土層堆積状況の確認・図化、撮影を行った。遺物は、各遺構ごとに必要に応じてトータルステーションを用いて出土位置を記録した。なお、出土層位等が明らかな場合は、層位を優先して取上げた。

検出された遺構の記録保存は平面・断面測量及び写真で対応している。測量は GPS により世界測地系

に基づいた基準点・水準点を設置し、これをもとにグリッドの設置及び平面・断面測量を行った。遺構図面は平面・断面図とも基本 1/20 縮尺で作成し、平面図はトータルステーションによる 3 次元測量、断面図は手実測で対応した。遺構写真は調査の進捗に併せて随時撮影し、35 mm 白黒・35 mm カラーリバーサル・500 万画素相当のデジタルカメラで対応した。

整理作業 整理作業は平成 29 年 9 月 1 日から行った。出土した遺物は、すべて洗浄した後、注記は手作業で、ポスターカラー（白）を用いて行った。注記の記入項目は遺跡番号・調査地点・遺構番号・遺物番号・出土年月日である。復元作業には、溶剤系接着剤（セメダイン C）を用いて接着し、欠落部分についてはエポキシ系樹脂を用いて充填した。接合・復元作業終了後、すべての遺物について時期・種別・器種・部位・文様の有無で分類し、遺構毎・グリッド毎にその総点数と総重量を計測し記録した。記録後、報告書掲載遺物を抽出し、写真撮影及び実測図作成を行った。実測図作成は拓本・実測・デジタルトレースを順次行い、デジタルデータによる図版の作成・編集を行った。

なお、本文執筆・編集には Adobe Indesign CS2 を使用した。

第 3 節 調査・整理の経過

発掘調査は平成 29 年 8 月 17 日から 8 月 31 日まで実施した。経過は以下のとおりである。

8 月 17 日 重機による表土除去作業を開始する。

8 月 18 日 発掘調査補助員を投入する。遺構確認をした後、遺構調査を開始する。重機による表土除去を終了する。

8 月 21～24 日 第 1 号竪穴建物跡を中心に調査を進める。土層堆積状況図作成。遺物出土状況写真撮影。第 1 号竪穴建物跡完掘写真撮影。土坑・ピット群の掘り込みを終了する。

8 月 25 日 市教育委員会による終了確認。

8 月 28 日 ドローンによる空撮を行う。トータルステーションによる測量が終了する。

8 月 29 日 重機による調査区埋め戻し作業を開始する。翌 30 日に終了。埋め戻し状況について、コスモ総合建設株式会社が確認する。

8 月 31 日 器材等を撤収し、現地における業務を終了する。

整理作業は平成 29 年 9 月 1 日から平成 30 年 7 月 31 日まで実施した。経過は以下のとおりである。

9 月 1 日 遺物洗浄作業を開始する。

9 月 19 日 遺物注記作業の開始と並行して、遺構図の修正と取り込みを行う。

10 月 2 日 遺物の接合・復元を行う。その後、遺物分類・選び出しを行う。

2 月 13 日 遺構図のトレースに着手するとともに遺物の写真撮影を行う。

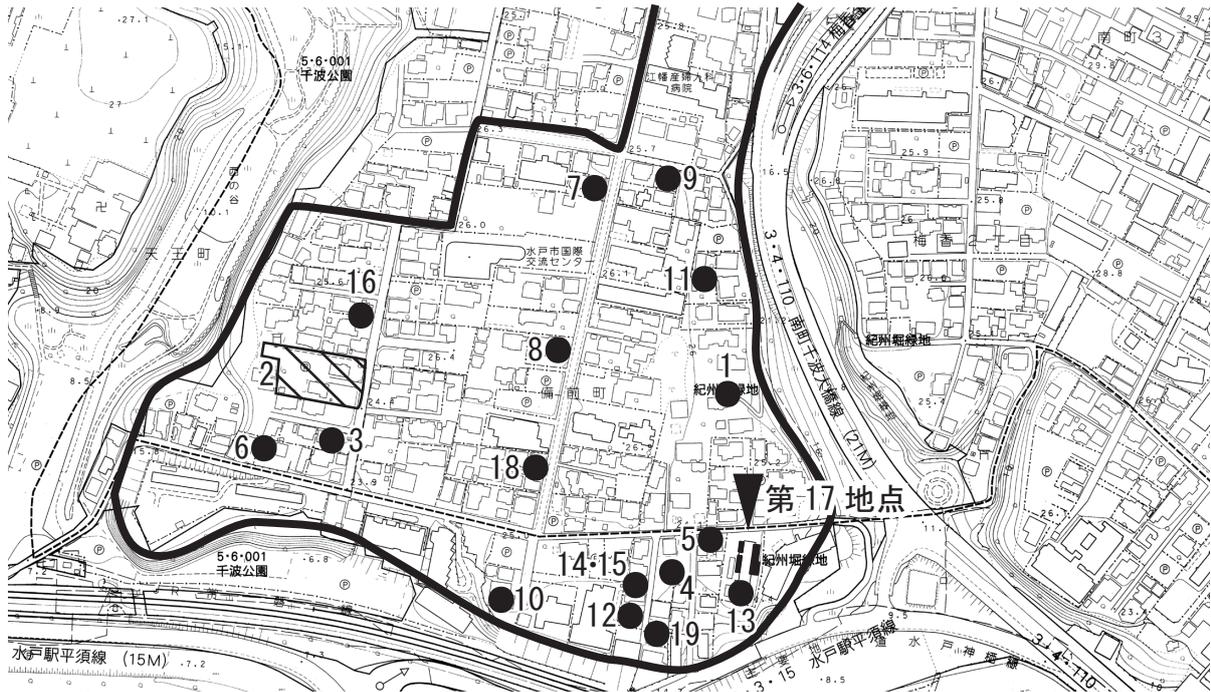
3 月 5 日 遺物の実測を開始するとともに、観察表の作成を行う。

4 月 9 日 遺構原稿の執筆に着手し、遺物実測図のトレースも開始する。

5 月 21 日 版組をし、報告書を入稿する。

6 月 11 日 報告書の校正を行う。

7 月 31 日 報告書を納本する。



第1図 調査地点位置図及び既往の調査地点 (1 : 5, 000)

第1表 既往の調査地点一覧表

地点数	回数	調査場所	調査年月日			遺構	遺物	備考
1	1	備前町 768-2	平成 18 年 3 月 17 日	試	個人住宅	—	○	水戸市教育委員会 2007
2	1	天王町 1727- 3ほか12筆	平成 18 年 5 月 17 日	試	宅地造成	○	○	水戸市教育委員会 2009a
	2	天王町 869- 7外10筆	平成 25 年 7 月 30 日	試	売買調査	○	○	
	3	天王町 869- 1他	平成 28 年 7 月 13 日	試	宅地造成	○	○	
	4	天王町 869- 1 8他	平成 28 年 7 月 15 日	試	個人住宅	—	○	
	5	天王町 868- 1～3, 869- 1～8	平成 28 年 8 月 9 日	試	宅地分譲・個人住宅	○	○	
	6	天王町 868- 3, 869- 5・7	平成 29 年 7 月 10 日 ～8月4日	本	宅地分譲・個人住宅	○	○	縄文時代後期土坑1基, 平安時代堅穴建物跡4軒他
3	1	天王町 864- 5	平成 18 年 10 月 11 日	試	個人住宅	—	○	水戸市教育委員会 2009a
4	1	備前町 754- 4, ・11・12	平成 21 年 3 月 13 日	試	個人住宅	○	○	蒔絵箱物出土, 水戸市教育委員会 2011
5	1	備前町 752- 8	平成 22 年 6 月 4 日	試	個人住宅	—	○	
6	1	天王町 862- 1	平成 24 年 5 月 11 日	試		—	—	
7	1	備前町 845- 6	平成 25 年 3 月 5 日	試	個人住宅	—	—	
8	1	備前町 863- 4地内	平成 25 年 3 月 5 日	試	個人住宅	○	○	
9	1	備前町 808- 5	平成 25 年 4 月 5 日	試	個人住宅	—	—	
10	1	備前町 756- 5, 757- 7	平成 26 年 5 月 1 5 日	試	共同住宅	—	—	
11	1	備前町 777- 2, 777- 3	平成 26 年 10 月 26 日	試	個人住宅	—	○	
12	1	備前町 755-11	平成 27 年 9 月 30 日	試	個人住宅	○	○	
	2	備前町 755-11	平成 28 年 4 月 12 日 ～4月28日	本	個人住宅	○	○	縄文時代後期加曾利B式堅穴建物跡1軒
13	1	備前町 750- 3・4・5	平成 28 年 12 月 21 日	試	個人住宅	—	—	
14	1	備前町 754- 3の一部	平成 28 年 12 月 21 日	試	建売住宅	○	○	
15	1	備前町 754- 3の一部	平成 28 年 12 月 21 日	試	建売住宅	○	○	
16	1	天王町 872	平成 29 年 4 月 18 日	試	共同住宅	○	○	
	2	天王町 872	平成 29 年 7 月 25 日 ～8月20日	本	共同住宅	○	○	古墳時代前期堅穴建物跡1軒, 平安時代土坑1基, 近世の遺構多数
17	1	備前町 750- 2	平成 29 年 4 月 18 日	試	共同住宅	○	○	
	2	備前町 750- 2	平成 29 年 8 月 17 日 ～8月31日	本	共同住宅	○	○	縄文時代中期加曾利E1式堅穴建物跡1軒・本報告書
18	1	備前町 856- 1	平成 29 年 6 月 13 日	試	個人住宅	○	○	縄文時代後期加曾利B式堅穴建物跡
19	1	備前町 755- 8	平成 29 年 10 月 11 日	試	個人住宅	—	—	

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

茨城県は関東平野の北東部に位置し、水戸市はその東辺中程に所在する。市域の北部を流れる那珂川は、栃木県的那須連山を水源とし、八溝山地の西縁を南へ流れた後、那珂台地と東茨城台地との間を南東流して太平洋へと注ぐ。那珂川の流路には沖積低地が形成され、これに沿うように東茨城台地が東に向かって突出し、その東部は水戸台地と呼称される。水戸台地は支谷により四つに細分され、北西より上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地などと呼ばれる。

遺跡是那珂川と同支流の沢渡川・桜川の間を東西に延びる上市台地の南縁、標高 25～26 m 付近に立地し、南方に千波湖を望む。調査地の西を流れて千波湖に注ぐ青川はかつて水戸城の外堀として利用されていた。

第2節 歴史的環境

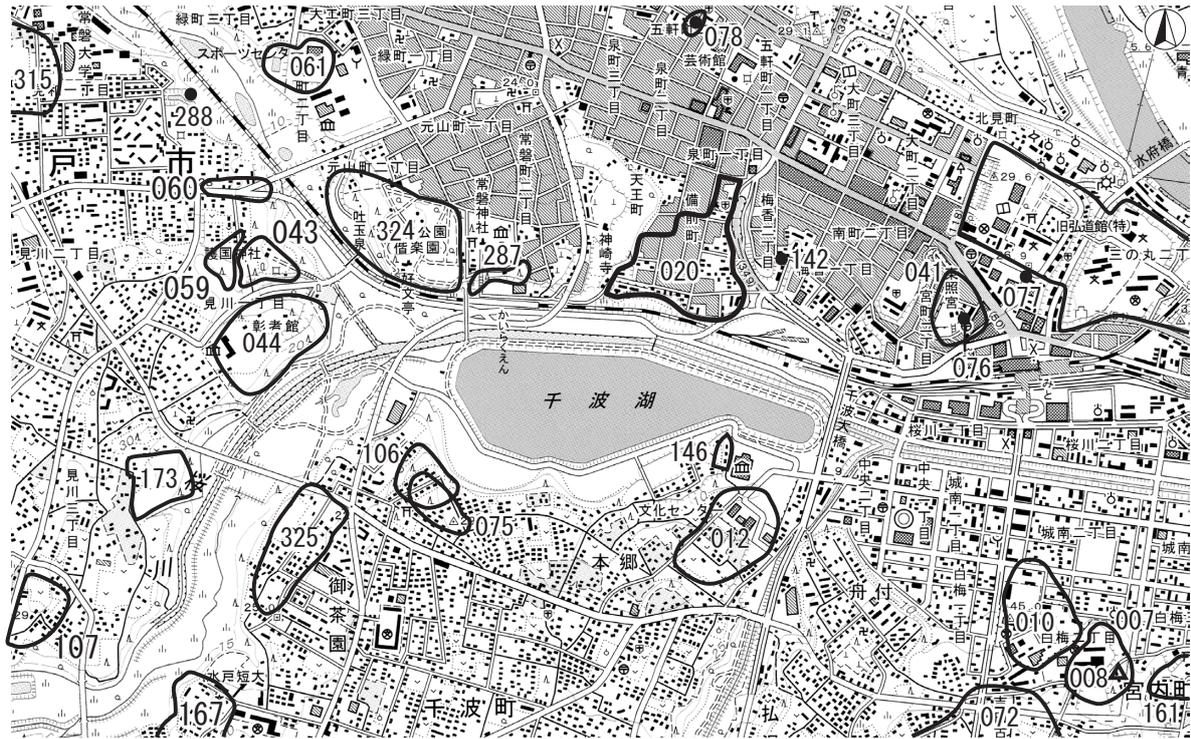
当遺跡の立地する水戸台地には、縄文時代から近世にわたる遺跡が所在する（第2図、第2表）。ここでは、近隣の遺跡を中心に概観する。

旧石器時代 近隣に明確な調査事例は乏しいものの、採集遺物等に良好な資料の存在が知られており、該期における土地利用を示唆する（川口 2005, 2008）。

縄文時代 上市台地では当遺跡が中期前葉から晩期の集落跡として知られる。千波湖の南の千波・吉田台地には、水戸南高校遺跡、吉田貝塚、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、下本郷遺跡、千波山遺跡、薬王院東遺跡、柳崎貝塚等、早期から後・晩期にわたる多数の遺跡が知られる。なお、吉田貝塚や柳崎貝塚のように縄文時代に限定される遺跡と、水戸南高校遺跡や大鋸町遺跡のように後の時期まで継続される遺跡とが見られる。

弥生時代 上市台地では東照宮境内遺跡が知られるのみであるが、吉田台地には水戸南高校遺跡、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、薬王院東遺跡など多く所在する。いずれも後期に形成された集落である。

古墳時代 該期の遺跡としては古墳（群）と集落跡がある。上市台地には東照宮境内古墳群、三の丸古墳、五軒町古墳群、愛宕山古墳などが知られる。国指定史跡の愛宕山古墳は全長 140 m の前方後円墳で中期に属する。千波・吉田台地には千波山古墳群や吉田古墳群などが所在する。国指定史跡の吉田古墳群 1 号墳は、多角形墳で大型切石による横穴式石室をもち、玄室の壁面には線刻画が遺存し、7 世紀前～中葉の所産と考えられる（水戸市教育委員会編 2006）。集落跡に目を向けると、当遺跡の 16 地点（前回調査区）や水戸城二の丸の調査で前期の集落跡が確認されており、吉田台地の大鋸町遺跡やお下屋敷遺跡も該期の遺跡である。また、中期の集落跡は古式須恵器が出土した大鋸町遺跡が知られるのみである。後期の集落跡は前述の大鋸町遺跡の他、お下屋敷遺跡、吉田神社遺跡、水戸南高校遺跡などがある。なお、市域における該期の集落跡は 7 世紀前半代で一旦途絶える傾向を示し、7 世紀後半代には後に郡家が設置される台渡里官衙遺跡群周辺に集中する現象が指摘されている（水戸市教育委員会編 2004）。



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	現況	時代・時期						備考	
					旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世		近世
007	水戸南高校遺跡	白梅2丁目	集落跡	校地								湮滅
008	吉田貝塚	元吉田町井坂	貝塚	道路								
010	お下屋敷遺跡	白梅2丁目	集落跡	境内								湮滅
012	下本郷遺跡	千波町下本郷	集落跡	宅地								
020	釜神町遺跡	備前町	集落跡	宅地								
041	東照宮境内遺跡	宮町2丁目	集落跡	境内								湮滅
043	植松遺跡	見川1丁目護国神社境内	集落跡	宅地, 境内								
044	見川町塚畑	見川町塚畑	集落跡	宅地								
059	横西遺跡	見川1丁目	集落跡	宅地, 畑地								
060	坂上遺跡	見和1丁目	集落跡	道路								湮滅
061	東町遺跡	緑町2丁目外	集落跡	運動公園								湮滅
072	吉田古墳群	元吉田町東組	古墳群	宅地								
075	千波山古墳群	千波町千波山	古墳群	公園								
076	東照宮境内内古墳群	宮町2丁目	古墳群	境内								湮滅
077	三の丸古墳	三の丸1丁目	古墳	宅地								名称変更, 湮滅
078	五軒町古墳群	五軒町2丁目	古墳群	教会								湮滅
106	千波山遺跡	千波町千波山	集落跡	宅地								
107	大内田遺跡	見川町3丁目	集落跡	宅地, 畑地								
128	薬王院東遺跡	元吉田町東組	集落跡	宅地								
142	鷹匠町遺跡	梅香2丁目	火葬墓	宅地								名称変更
146	柳崎貝塚	千波町柳崎	貝塚	宅地								
161	吉田神社遺跡	宮内町	集落跡	境内								
167	杓掛遺跡	見川町杓掛	集落跡	宅地								湮滅
173	見川城跡	見川3丁目	城館跡	宅地, 畑地								
287	七面製陶所跡	常盤町1丁目	生産遺跡	山林								
315	見和1丁目遺跡	見和1丁目	包蔵地	宅地								
324	旧偕楽園	常盤町一丁目	庭園跡	公園								
325	御茶園遺跡	千波町御茶園	包蔵地	宅地								

奈良・平安時代 律令制下における当地域は、常陸国那賀郡に属し、郡の政治・文化の中心たる郡家は国指定史跡台渡里官衙遺跡群に比定されている。郡庁院、正倉院に付属寺院を兼ね備えたもので、東方脇に古代の官道東海道の存在も想定される。該期の集落跡は、当遺跡や水戸城の二の丸・三の丸地区の他、吉田台地のお下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、薬王院東遺跡、東組遺跡など広範囲な集落跡の分布が見られる。なお、東に隣接する鷹匠町遺跡では火葬墓の存在が知られる。

中世 12世紀末から13世紀初め頃に水戸城本丸付近に馬場資幹が居館を築き、応永33(1426)年に江戸通房がこれを奪取した。さらに、天正18(1590)年には佐竹義宣が取って変わり、大規模な「水戸普請」を行い、現在の水戸城の祖型を形成したとされる。なお、水戸城の南東の低地には竹隅城跡に比定される横竹隅遺跡、吉田台地の吉田城跡、集落跡の東組遺跡が所在する。

近世 慶長7(1602)年、関ヶ原の合戦における対応から佐竹氏は秋田へ移封となり、徳川家康の五男武田信吉が入部したが、翌年嗣子無く病没し、十男頼将(後の頼宣)が入部する。慶長14(1609)年頼宣が駿府へ移封となり、十一男の頼房が入部し、水戸徳川家の祖となる。頼房は水戸城と城下を整備して二の丸に居館(御殿)を構えた。また、調査区の西を流れる青川を利用して大工町堀を設けて惣構(外堀)とし、当地は以来武家地として利用されてきた。元禄11(1698)年には2代藩主光圀によって二の丸に水戸彰考館が開設され、以後『大日本史』編さんの舞台となる。また、光圀は下市地区の水不足対策として笠原水道を敷設し、樋として「神崎岩」と呼ばれる軟質の石材を加工したものを用いた。笠原水道は、延10.7kmに及ぶ長大なもの(水戸市教育委員会編 2010)で、この神崎岩の採掘場(岩切場)の一部が当遺跡の南側崖下に残っている。9代藩主斉昭は天保12(1841)年、三の丸に藩校弘道館を設立、翌天保13(1842)年には庭園・偕楽園を開園している。さらに、殖産興業の一環として偕楽園の崖下に陶器製陶所(七面製陶所)を設けるなどした。弘道館は敷地面積が10.5ヘクタールと藩校としては日本最大の規模をもち、国指定特別史跡となっている。偕楽園は常磐公園として国の史跡・名勝に指定されている。

なお、水戸城跡においてはこれまで市教委、茨城県教育財団などにより60以上に及ぶ試掘・発掘調査が重ねられ、種々の貴重な資料が得られている。殊に、水戸市立第二中学校の工事に伴う二の丸彰考館の調査では、水戸城の変遷を示す有益な知見とともに彰考館に関する膨大な資料が得られた(水戸市教育委員会編 2014)。

また、当遺跡では、後述の如く小規模な調査が多いものの、第4地点から黒地蒔絵箱物と見られる漆器が出土するなど、武家地の片鱗を窺わせる(水戸市教育委員会編 2011)。

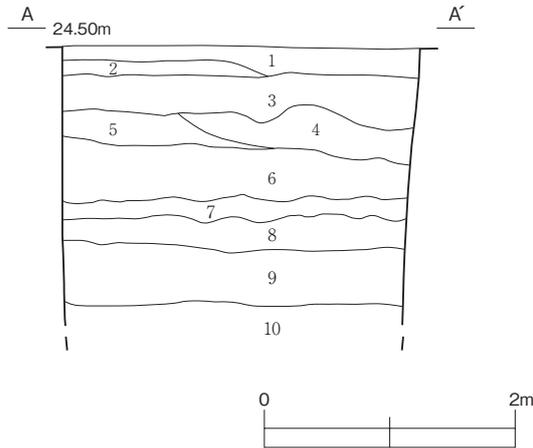
近代 明治以降も当地は前代の土地利用のまま後裔の士族が居住する例が多かったようである。しかし、昭和20年8月2日、未明の所謂水戸大空襲によって市街地の90%程が焼失し、当該地区もほとんどが焼けたと伝えられる。これ以降、居住者の変動があったようであるが、近隣は後裔の方々の居住が目立つ。

※ 本章の「遺跡の位置と環境」については、当遺跡についての報告である水戸市埋蔵文化財調査報告第98集「釜神町遺跡(第16地点)」(下記文献)を引用し、その後の知見を加え記載した。

水野順敏 関口慶久 新垣清貴 2018 『釜神町遺跡(第16地点)共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第98集 水戸市教育委員会

第Ⅲ章 発見された遺構・遺物

第1節 基本層序



土層解説

- 1 砕石層
- 2 山砂層 ※現在の整地層
- 3 旧官舎解体造成に伴う埋土層、白色粘土ブロック・ロームブロック・コンクリートブロックなど混ざる
- 4 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒子・ロームブロック微量、締り強い(上からの人的な転圧による)
- 5 黒褐色 (10YR1/3) ローム小ブロック少量
- 6 黒褐色 (10YR1/3) 土器の小片を含む
- 7 褐色 (10YR4/4) ローム粒子少量
- 8 黄褐色 (10YR5/8) ソフトローム層
暗赤褐色粒子微量含む
締り強い
- 9 黄褐色 (10YR5/8) ハードローム層、暗赤褐色粒子少量含む、締り強い
- 10 明黄褐色 (10YR6/8) 鹿沼パミス少量、暗褐色土微量含む、締り強い

第3図 基本土層図

調査区2-2区、南壁で層序を確認した。

第1～5層は近代以降に整地された層で黒褐色土の旧表土上は人為的に転圧され、その上に旧官舎解体造成に伴うコンクリートなどが混ざる第3層や山砂の第2層、碎石の第1層が盛られ、整地されている。

第6層は土器の小片を含む黒褐色土で、旧表土である。層厚は26～48cmである。

第7層はローム粒子を少量含む褐色土である。層厚は14～18cmで、ソフトローム層への漸移層である。

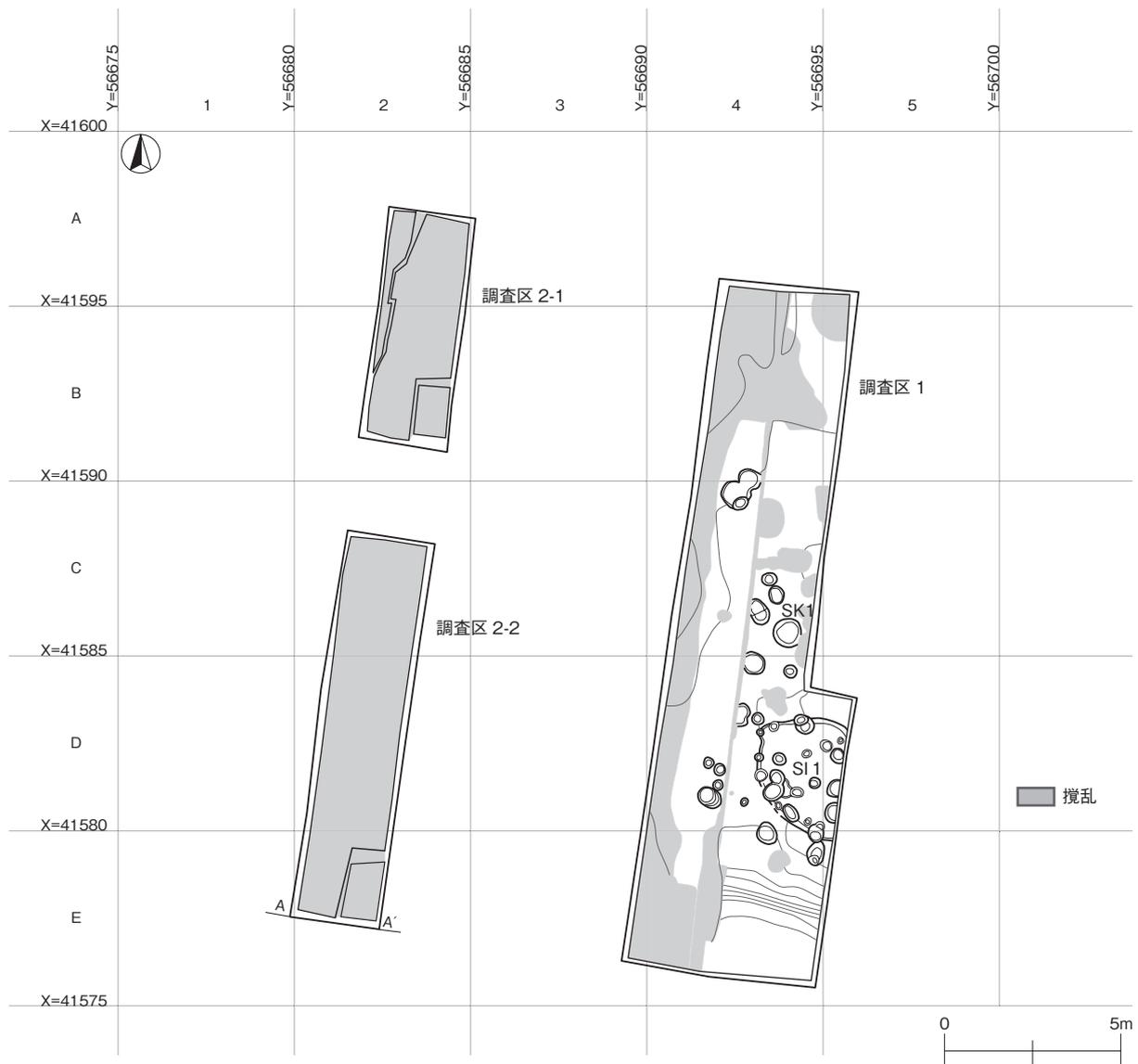
第8層は今市・七本桜軽石を微量含む黄褐色のソフトローム層である。締まりは強く、層厚は22～32cmである。本層上面が当遺跡の遺構確認面である。

第9層は黄褐色のハードローム層である。暗赤褐色粒子を少量含んでおり、締まりは強い。層厚は40～52cmである。

第10層は明黄褐色を呈するハードローム層である。鹿沼パミスを少量、暗褐色土を微量含み、締まりは強い。層厚は20cm以上である。

第2節 遺構・遺物

当遺跡で確認された遺構は、縄文時代の竪穴建物跡1軒、縄文時代の土坑1基、時期不明のピット31基である。竪穴建物跡出土の遺物は縄文時代の土器片203点、縄文時代の石器1点である。以下、遺構と遺物について記述する。



第4図 調査区設定図

1 竪穴建物跡

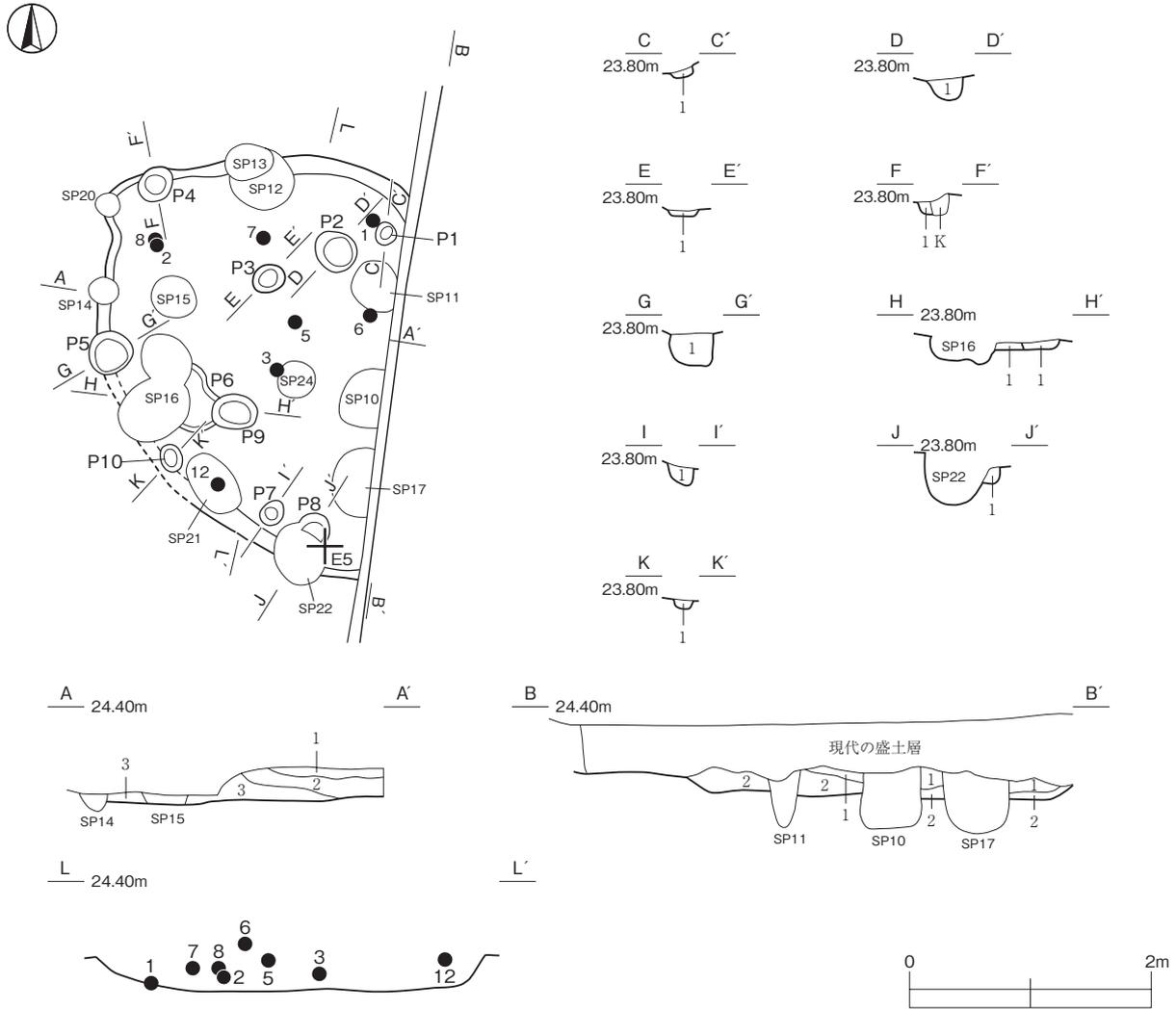
第1号竪穴建物跡 (第6図)

位置 調査区1南東部のD4区、標高24.5mほどの台地縁辺部に位置している。 **重複関係** SP10～SP17, SP20～SP22, SP24に掘り込まれている。 **規模と構造** 東部が調査区域外に伸びているため、確認できた長径方向は2.95mで、短径は3.04mである。形状は現存部から楕円形と推定され、長径方向はN-55°-Wである。 **床** ほぼ平坦で、あまり踏み固められてはいない。 **ピット** 10か所。P2・P9は深さ17・10cmで規模と配置から支柱穴である。P1・P4・P5・P7・P8・P10は深さ6～28cmで、壁に沿って確認されていることから、壁柱穴と考えられる。P3は深さ6cmで、性格は不明である。 **覆土** 3層に分層できる。ローム粒子を中量・多量に含む層が堆積しており、埋め戻されている。 **遺物出土状況** 1の深鉢はほぼ完形で床面から出土しており、遺棄されたものと考えられる。そのほかの遺物は覆土中から破片で出土しており、埋め戻す際に一緒に投棄されたものと



第5図 調査区1全体図

考えられる。 **所見** 時期は出土土器から、縄文時代中期後葉（加曾利E1式期）と考えられる。性格については、炉が確認されなかったことや遺構の確認面がハードルーム面であったことなどから、当地域のこの時期に見られる炉を持たない有段式竪穴建物遺構の可能性はある。



第6図 第1号竪穴建物跡実測図

土層解説

SI-1

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/5) ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性普通
- 2 褐色 (10YR4/6) ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性普通
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性普通

SI-1 ピット

- 1 褐色 (10YR4/6) ローム粒子多量, 炭化粒子微量, ※P5は鹿沼バミスのブロックが少量混じる

第3表 第1号竪穴建物跡内ピット一覧表

SI 1 ピット 番号	形状	規模(cm)	
		長軸(径)×短軸(径)	深さ
1	円形	18×18	8
2	円形	36×32	17
3	円形	28×23	6
4	円形	31×26	16
5	円形	37×34	28

SI 1 ピット 番号	形状	規模(cm)	
		長軸(径)×短軸(径)	深さ
6	不整形	56×(19)	11
7	円形	22×18	14
8	不明	27×(15)	13
9	楕円形	37×27	10
10	円形	23×18	6



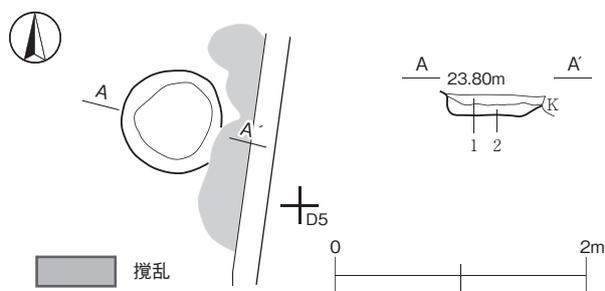
第7图 第1号竖穴建物跡出土遺物実測図

第4表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文	深鉢	18.2	21.0	7.5	長石・石英・雲母	外：にぶい褐 内：黒褐	良好	口縁に突起 口唇部・体部全面に無節L（縦） 縞状施文 底面原体圧痕	床面	90% 大木8b式
2	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・細砂粒	外：褐 内：灰黄褐	良好	口唇部肥厚 口縁部背割れ隆帯による波状文 隆帯貼り付け部強いナデ	覆土下層	加曾利E1式
3	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・海綿状骨針	外・内： 灰黄褐	普通	口縁部強く内湾 口縁に沿って隆帯貼付 隆帯無節L（横） 口縁部無節L（縦）施文	覆土下層	加曾利E1式
4	縄文	浅鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・海綿状骨針	外：にぶい褐 内：褐	良好	口唇部肥厚 外・内面丁寧なミガキ 赤彩痕	覆土中	加曾利E1式
5	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・細砂粒	外：灰褐 内：黒褐	普通	単節縄文RL（縦）上に2本1組の沈線による直線文，曲線文	覆土上層	大木8b式
6	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・細砂粒	外：赤褐 内：にぶい黄褐	普通	単節縄文RL（斜）上に沈線を伴う隆帯による曲線文	覆土上層	加曾利E1式
7	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母	外：黒褐 内：灰黄褐	普通	単節縄文RL（縦）に隆帯周回	覆土上層	加曾利E1式
8	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母	外・内：灰褐	普通	単節縄文LR（縦）施文	覆土上層	加曾利E1式
9	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・海綿状骨針	外：浅黄橙 内：黄橙	良好	単節縄文RL（縦）上に隆帯周回	覆土中	加曾利E1式
10	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・海綿状骨針	外：黒褐 内：灰褐	良好	沈線区画による帯縄文部に単節縄文RL（縦） 施文	覆土中	後世に混入 加曾利B式
11	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・細砂粒	外：にぶい褐 内：黒	普通	単節縄文RL（縦）上に2本の沈線による懸垂文	覆土中	大木8b式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	石皿	<11.2>	<6.0>	5.8	<424>	砂岩	全面被熱，表面凹み11か所	覆土上層	5%

2 土坑



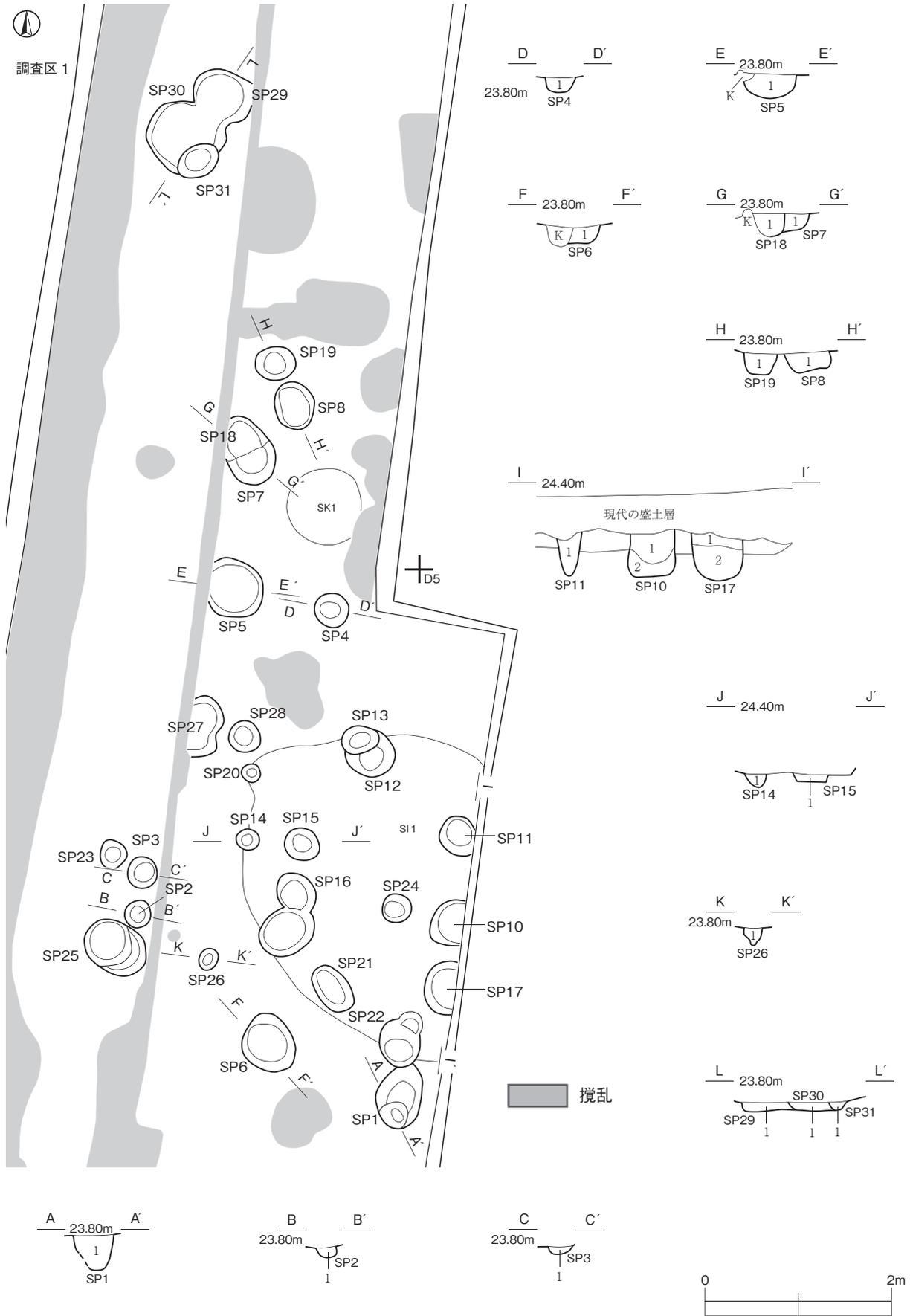
土層解説

- 1 黒褐色 (10YR3/2) ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 (10YR3/2) ローム粒子多量，粘性普通，締まりあり

第8図 第1号土坑実測図

第1号土坑（第8図）

位置 調査区1のC4区，標高23.6mの台地縁辺部に位置している。 **規模と形状** 径0.86mの円形である。深さ18cmで，底面は平坦である。壁は外傾している。 **覆土** 2層に分層できる。ローム粒子などが多量に含まれていることから，埋め戻されている。 **遺物出土状況** 縄文土器片3点が覆土中から出土している。埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。土器片は小片で図示できない。 **所見** 時期は出土土器から縄文時代中期と考えられる。性格は不明である。



第9図 第1～31号ピット実測図

3 ピット

ピットは調査区1の第1号竪穴建物跡やその周辺を中心に31基確認されている。第1号竪穴建物跡と重複関係にあるピット12基はすべて、第1号竪穴建物跡を掘り込んでいる。遺物が出土したピットはいくつかあったが、覆土の状況からそれらは流れ込みと考えられる。このようなことから、これらのピットの時期や性格については不明である。以下、実測図(第9図)及び一覧表を掲載する。

土層解説

SP1

1 褐色(10YR4/4) ローム粒子・焼土粒子微量, 粘性普通
縮まりあり

SP2

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量
粘性普通, 縮まりあり

SP3

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子多量, 粘性普通, 縮まりあり

SP4

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子少量, 炭化粒子微量, 粘性普通
縮まりあり

SP5

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
粘性普通, 縮まりあり

SP6

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子多量, 炭化粒子微量, 粘性普通
縮まりあり

SP7

1 褐色(10YR4/6) 焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性普通
縮まりあり

SP8

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子・炭化粒子微量, 粘性普通
縮まりあり

SP10

1 黒褐色(10YR3/2) ローム小ブロック・ローム粒子多量
粘性普通, 縮まりあり

2 黒褐色(10YR3/2) ローム粒子多量, 炭化粒子微量, 粘性普通
縮まりあり

SP11

1 黒褐色(10YR3/2) ローム小ブロック・ローム粒子多量
粘性普通, 縮まりあり

SP14

1 黒褐色(10YR3/2) ローム小ブロック・ローム粒子多量
粘性普通, 縮まりあり

SP15

1 黒褐色(10YR3/2) ローム小ブロック・ローム粒子多量
粘性普通, 縮まりあり

SP17

1 黒褐色(10YR3/2) ローム小ブロック・ローム粒子多量
粘性普通, 縮まりあり

2 暗褐色(10YR3/4) ローム粒子多量

粘性普通, 縮まりあり

SP18

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子多量, ローム小ブロック
焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性普通, 縮まりあり

SP19

1 褐色(10YR4/6) ロームブロック・ローム粒子少量
炭化物・炭化粒子微量, 粘性普通, 縮まりあり

SP26

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子微量

SP29

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子少量

SP30

1 褐色(10YR4/6) ローム粒子多量

SP31

1 黒褐色(10YR3/2) ローム粒子微量

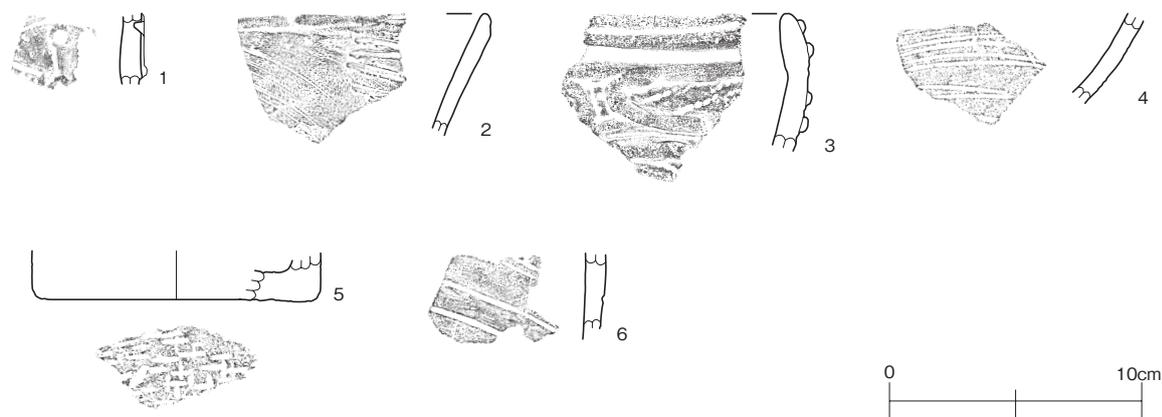
第5表 ピット一覧表

番号	形状	規模(cm)	
		長軸(径)×短軸(径)	深さ
1	楕円形	71×48	47
2	円形	28×27	7
3	円形	34×31	12
4	円形	37×36	17
5	円形	68×61	23
6	楕円形	64×55	24
7	不明	51×〈35〉	27
8	楕円形	52×42	19
10	不明	49×〈33〉	46
11	不明	45×〈38〉	39
12	不明	50×〈30〉	23
13	楕円形	40×29	43
14	円形	25×22	18
15	円形	38×34	22
16	ひょうたん形	90×40・54	29

番号	形状	規模(cm)	
		長軸(径)×短軸(径)	深さ
17	不明	57×〈31〉	48
18	不定形	49×41	29
19	円形	43×37	25
20	円形	20×19	19
21	楕円形	55×35	6
22	円形	51×49	34
23	円形	30×28	8
24	円形	31×30	20
25	楕円形	70×52	23
26	円形	24×20	17
27	ひょうたん形	65×〈30〉・〈34〉	25
28	円形	33×33	10
29	不明	66×〈51〉	6
30	不明	69×〈43〉	13
31	楕円形	48×34	28

4 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図（第10図）と観察表で掲載する。



第10図 遺構外出土遺物実測図

第6表 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文	深鉢	—	—	—	長石・雲母	外：黒褐 内：黒	普通	凹みを伴うI字状貼り付け文	E4区	堀之内I式
2	縄文	深鉢	—	—	—	長石・砂粒・ 海綿状骨針	外：にぶい黄褐 内：にぶい褐	良好	口縁に沿って沈線文 体部斜位の削り	E4区	堀之内I式
3	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・ 雲母・細砂粒	外：にぶい黄褐 内：にぶい黄橙	普通	断面蒲鉾状の隆帯による区画文	D5区	加曾利E1式
4	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英	外・内：黒褐	良好	外面条線文 内面ミガキ	D5区	加曾利B式
5	縄文	深鉢	—	(1.95)	(10.6)	長石・石英・ 雲母	外：明赤褐 内：黒褐	普通	底面 網代痕	D5区	加曾利B式
6	縄文	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・ 海綿状骨針	外：にぶい黄褐 内：褐灰	良好	平行沈線文	表土	加曾利B式

第7表 出土遺物集計表

遺構名	出土位置	縄文土器			弥生土器			土師器			須恵器			陶磁器(中世以降)					破片総数	土器片重量(g)	石器
		中期	後期	不明	中期	後期	不明	古墳	奈良	平安	古墳	奈良	平安	陶器	磁器	土師質	瓦質	瓦			
SI-1	覆土	203			1					2									206	4925	1 (424g)
SK-1	覆土	3																	3	65	
SP-1	覆土	5																	5	46	
SP-2	覆土	1																	1	11	
SP-4	覆土	6																	6	61	
SP-5	覆土	10																	10	179	
SP-6	覆土	3	6																9	154	
SP-8	覆土	3	4																7	108	
SP-10	覆土	3			1														4	122	
SP-11	覆土	1																	1	33	
SP-12	覆土	1				1		1											3	45	
SP-13	覆土		1																1	6	

遺構名	出土位置	縄文土器			弥生土器			土師器			須恵器			陶磁器(中世以降)					破片総数	土器片重量(g)	石器
		中期	後期	不明	中期	後期	不明	古墳	奈良	平安	古墳	奈良	平安	陶器	磁器	土師質	瓦質	瓦			
SP-16	覆土	2																	2	93	
SP-17	覆土		18					1											19	364	
SP-18	覆土		2																2	17	
SP-19	覆土	3	5																17	166	
SP-22	覆土	1	2																3	49	
SP-23	覆土			1															1	19	
SP-24	覆土	1																	1	32	
SP-25	覆土																				1 (37 g)
SP-27	覆土	5	2																7	71	
SP-28	覆土		2	3															5	26	
基本層序	覆土		7	4	1			3									3		18	268	
攪乱	覆土		16	7	6			2											31	440	1 (17 g)
合計		251	65	15	9	1	11	5	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0	362		3

【参考・引用文献】

- 伊東重敏 1971 『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書(応急版)』 水戸市教育委員会
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦 2008 「水戸市百合ヶ丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 清水哲 海老澤稔 仙波亨 内田勇樹 2017 「吉十北遺跡 勘十郎堀跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第419集 公益財団法人茨城県教育財団
- 関口慶久 2011a 「第4章 発掘調査」『水戸市指定有形文化財 八幡宮拝殿及び幣殿保存修理工事報告書』宗教法人八幡宮
- 関口慶久 2011b 「水戸城」『関東の名城を歩く 北関東編』吉川弘文館
- 関口慶久 2015 「中・近世における水戸城の展開」『第37回 茨城県考古学協会研究発表会 資料』茨城県考古学協会
- 日沖剛史 石丸敦史 川口武彦 色川順子 渥美賢吾 2008 『薄内遺跡(第1地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告第18集 水戸市教育委員会
- 吹野富美夫 川又清明 野田良直 浅野和久 2002 「宮後遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集(財)茨城県教育財団
- 水野順敏 関口慶久 新垣清貴 2018 『釜神町遺跡(第16地点)共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第98集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2004 『台渡里廃寺跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2006 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第11集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2009a 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第22集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2009b 『吉田古墳Ⅲ』水戸市埋蔵文化財調査報告第23集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2010 『笠原水道』水戸市埋蔵文化財調査報告第36集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2011 『平成20年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第43集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2014 『水戸城跡発掘調査1』水戸市埋蔵文化財調査報告書第61集 水戸市教育委員会
- 三輪孝幸 新垣清貴 川口武彦 関口慶久 2007 『坏遺跡(第4地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告第9集 水戸市教育委員会

第IV章 まとめ

第1節 土地利用の概観

当遺跡においては、平成30年3月現在で19地点27次に及ぶ発掘調査が実施されている。発掘調査の約半数が個人住宅、他も共同住宅等に伴う小規模な試掘調査が主体で、広い面積の調査例は少ないが、これまでの調査から当遺跡の土地利用について概観する。

縄文時代の遺構は、台地縁辺部に確認されている。千波湖を望む第12地点の調査では後期加曾利B式期の竪穴建物跡が、紀州堀寄りの遺跡南東端部の第17地点（本報告）では中期の加曾利E1式期の竪穴建物跡が、それぞれ1軒ずつ確認されている。当遺跡西部の第2地点では、後期の土坑1基が確認されている。中期・後期の集落は竪穴建物跡の確認状況や遺物の量から小規模なものと考えられる。

弥生時代の遺構は、既往の調査では確認されていない。

今回の調査では古墳時代の遺構は確認されなかったが、西部の第16地点で前期の竪穴建物跡が1軒確認されている。南北4.5m、東西4.6mの中型のものである。古墳時代の遺構が確認されているのはこの竪穴建物跡だけで、古墳時代の遺物の出土量も少ないことから、古墳時代前期における集落についても小規模なものと考えられる。

奈良・平安時代の遺構も今回の調査では確認されなかったが、遺跡西部、西の谷寄りの第2地点で竪穴建物跡が4軒、第16地点で土坑が1基確認されている。小規模ながらも集落の存在が窺える。当遺跡を含む那珂川と桜川（千波湖）に挟まれた水戸上市の台地周辺は、那賀郡常石郷に比定されている。常石はトキワと呼んで旧常磐村周辺が遺称地と考えられている。台渡里廃寺からは「常」とヘラ描きされた布目瓦が出土しており、郷の存在を裏付ける。現在、市街地となっている辺りに郷の中心集落があったのではないかと考えている。

中世の遺構・遺物はともに今回の調査では確認されていないが、第2地点第6次調査では、南北に延びる溝状遺構が確認されており、中世に土地利用された可能性がある。

当遺跡周辺は近世当時の地割が良く残されているとともに、近世以後もそのまま居住された家も多く、古地図との照合が可能な地域である。今回の調査では遺構は確認されなかったが、遺物としては遺跡南東部の第4地点から黒地蒔絵箱物と見られる漆器が出土している。遺跡西部の第16地点では、「水戸城下図」（天保10（1839）年作成／水戸市所蔵）との照合が可能で、水戸藩士である大岩家の後裔の方々が近年まで居住されていた。現況から推測される当時の敷地の平面規模は、南北約30m（間口）、東西は東の通りから奥まで約70mの長方形で、約2,100㎡（約640坪）とされている。

明治以降、当地区は水戸藩士の子孫の方々などが住まれて来たが、昭和20（1945）年8月2日の水戸大空襲により一帯も被災し、大部分の建物が消失したと伝えられている。今回の調査でも旧表土上の整地層の一部にはその痕跡が確認されている。

第2節 縄文時代中期の遺構・遺物について

今回の調査で、遺構の時期を確定できたのは縄文時代中期加曽利E1式期の竪穴建物跡1軒だけであつたので、ここでは、当遺跡の竪穴建物跡の特徴などからその性格などを考察する。

当遺跡の縄文時代中期の竪穴建物跡の特徴として、平面形が楕円形を呈することと床面に炉を持たないことを挙げることができる。この2つの特徴は、常総地域の阿玉台式期から加曽利E1式期における竪穴建物跡の特徴でもある。常総地域では、阿玉台I式期から阿玉台III式期頃まではほとんどの竪穴建物跡の床に炉を伴っていない。当地域で、竪穴建物跡に炉を伴うのは阿玉台III式（新）段階頃からで、その時期の集落が調査されている茨城町宮後遺跡や銚田市吉十北遺跡などでは、阿玉台IV式期では、半数以上の竪穴建物跡に炉が伴っている。阿玉台IV式期から加曽利E1式期において、炉を伴っていないのは、ほとんどが「有段式竪穴建物跡」とされているものである。当遺跡の第1号竪穴建物跡は、現代の盛土層下の成形されたハードローム面での確認であり、「有段式竪穴建物跡」の上段部については、存在していた可能性がある。

銚田市吉十北遺跡では、縄文時代中期の竪穴建物跡が36軒確認され、その中で「有段式竪穴建物跡」は3軒である。時期は阿玉台IV式期2軒、加曽利E1式期1軒で、加曽利E1式期の他の竪穴建物跡にはほとんどに炉が伴っている。吉十北遺跡の「有段式竪穴建物跡」から出土した遺物については、報告した47点を含む2,240点もの多量の土器片が出土した「有段式竪穴建物跡」があつたり、石器14点、石材母岩・石核97点、剥片30点など石器や石器の素材が多量に出土したりしている「有段式竪穴建物跡」があり注目された。報告書では、特徴的な遺物が出土している他の遺跡の「有段式竪穴建物跡」についても検討し、「有段式竪穴建物跡」の性格について、住居とは違った「土器作り、土器乾燥、石器作り、木製品作り、食品加工、堅果類選別などの作業を時季を決めて行う多目的作業場」との考えを提示している。当遺跡の第1号竪穴建物跡についても「有段式竪穴建物跡」で、性格は「多目的作業場」の可能性のあることを指摘しておきたい。

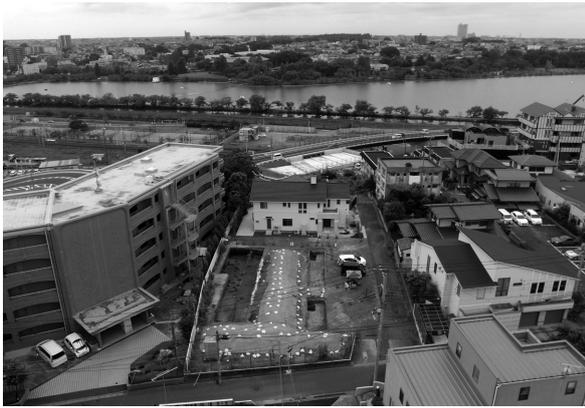
当遺跡での縄文時代中期の遺物分布は、今のところ、南東部（第17地点）に限られており、集落は小規模なものと考えられる。

最後に、第1号竪穴建物跡から出土した土器について、気付いた点を述べておきたい。

第7図1は第1号竪穴建物跡の床面から出土した深鉢である。この土器の特徴として、二点挙げられる。一つは口唇部が肥厚し、そこに縄文が施文されていること。二つ目は外面全体に縄文が縞状に施され、原体は無節であることである。口唇部の肥厚、縞状施文、原体が無節であることなどは、東北南部の大木7a式から大木8b式にかけて認められる特徴である。第7図5は2本一組の沈線による横線文や曲線文が肩部に施されており、体部に沈線文を多用する大木8b式の特徴を持つものであり、1や5は加曽利E1式文化圏の中に大木8b式土器が入ってきている例である。水戸周辺では、加曽利E1式文化圏と大木8式文化圏が重複しているのである。

（海老澤）

写真図版



A. 調査区遠景（北から）



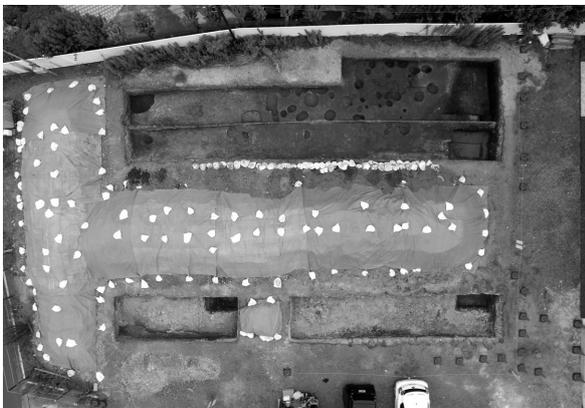
B. 調査区遠景（西から）



C. 調査前状況



D. 遺構確認状況



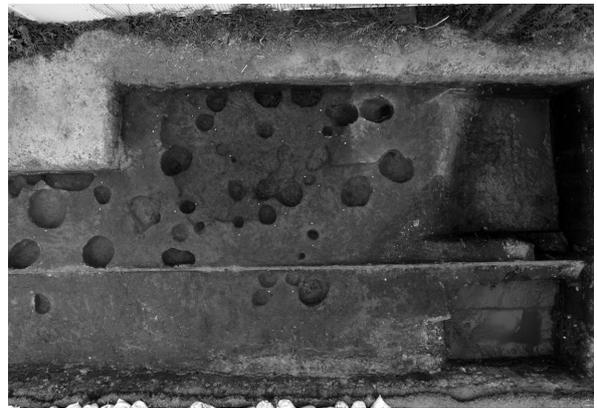
E. 調査区全景



F. 調査区1全景



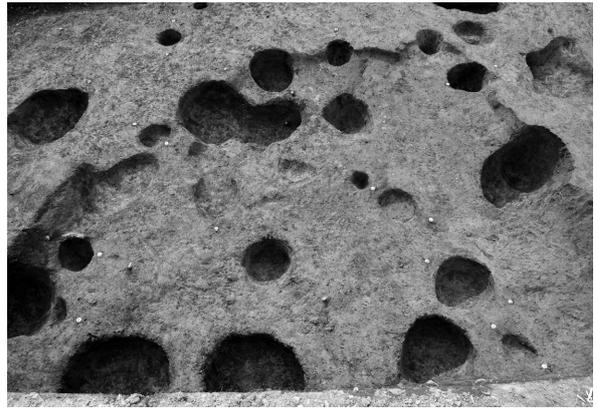
G. 調査区2全景



H. 第1号堅穴建物跡全景



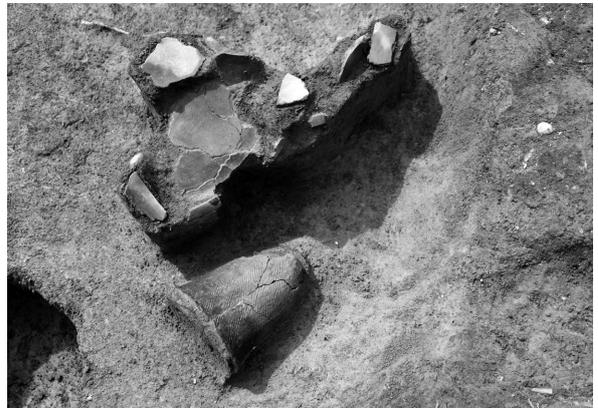
A. 第1号堅穴建物跡（北から）



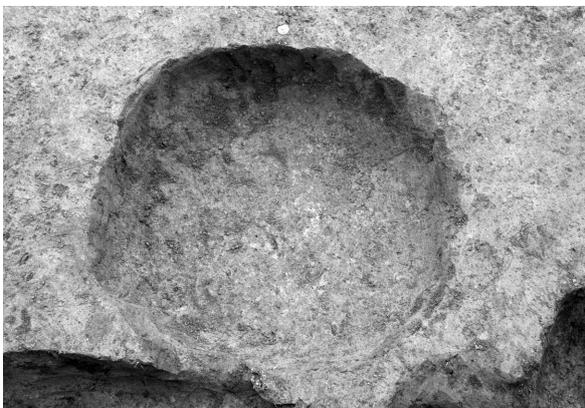
B. 第1号堅穴建物跡（東から）



C. 第1号堅穴建物跡 遺物出土状況（北から）



D. 第1号堅穴建物跡 遺物出土状況（東から）



E. 第1号土坑 完掘状況（東から）



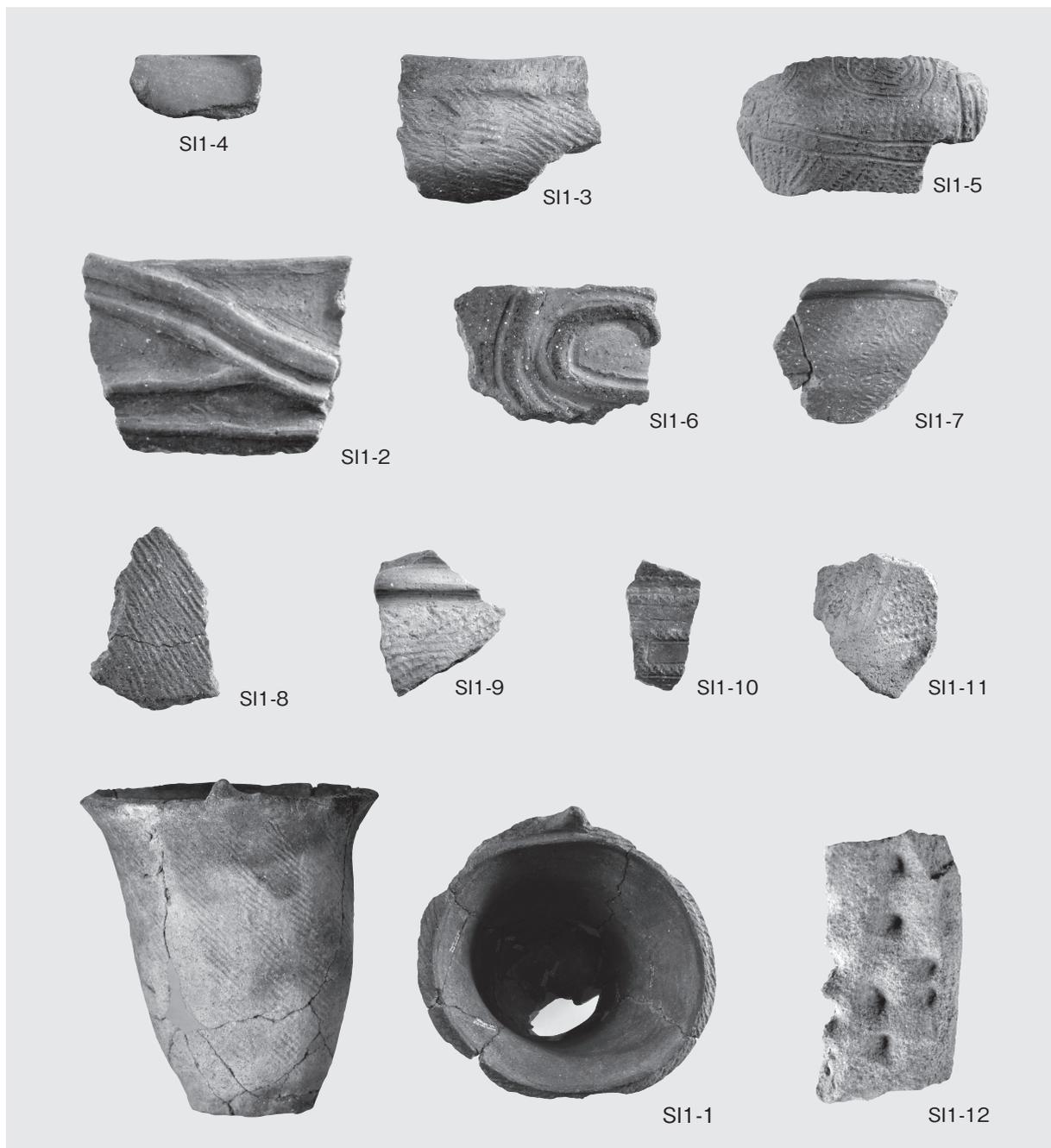
F. 第8・19号ピット 土層断面（西から）



G. 調査区1 終了状況（南西から）



H. 調査区1 終了状況（南から）



第 1 号豎穴建物跡，遺構外出土遺物

抄 録

ふりがな	かまがみちょういせき (だいじゅうななちてん)							
書名	釜神町遺跡 (第17地点)							
副書名	共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第99集							
著書名	海老澤稔 新垣清貴							
編集者名	海老澤稔							
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 茨城支所							
所在地	茨城県常総市菅生 2042-1 TEL 0297-27-0722							
発行機関	水戸市教育委員会							
所在地	茨城県水戸市笠原町 978-5 TEL 029-306-8672							
発行年月日	2018 (平成30) 年 7月24日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かまがみちょういせき 釜神町遺跡	みとしびぜんちょう 水戸市備前町 750-2	08201	020	36°	140°	2017年8月17日	189.75 m ²	共同住宅建設
				37′	46′)		
				31″	51″	2017年8月31日		
所収遺跡名	種類	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
釜神町遺跡 (第17地点)	集落跡 その他	縄文		竪穴建物跡 1軒	縄文土器 (深鉢・浅鉢)	石器 (石皿)		
		不明		ピット 31基	縄文土器 (深鉢)			
要約	縄文時代中期加曾利E 1式期の竪穴建物跡が1軒確認された。平面形は楕円形を呈し、床面に炉を持たないものである。当地域のこの時期の竪穴建物跡には一般的には炉を伴うことから、本遺構を鉾田市吉十北遺跡などの例から「有段式竪穴遺構」とし、性格については「多目的作業場」と考える。							

水戸市埋蔵文化財調査報告 第99集

釜神町遺跡（第17地点）

—共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 平成30（2018）年7月17日

発行 平成30（2018）年7月24日

編集 有限会社毛野考古学研究所 茨城支所

発行 水戸市教育委員会

印刷 株式会社高野高速印刷

〒310-0853 茨城県水戸市平須町1822-122

TEL. 029-305-5588